研究ノート

沖縄の門中

——佐敷町屋比久部落の事例——

安　和　守　茂

はしがき

本報告は，沖縄の門中についての＜研究ノート＞である。具体的には沖縄の門中について考えていくための筆者の一つの視点—門中における門中墓の意義—を提示してみたものである。

本報告のベースになっている材料は，沖縄本島南部に位置する佐敷町屋比久部落から集めたものである。屋比久部落は，典型的な南部村落として，門中制度の発達した村落である。

筆者が行なった調査については，昭和62年３月および昭和63年８月の調査が本報告の基礎になっている。いずれの調査も神戸大学社会学研究室が中心になって行なってきたもので，前者については屋比久部落の全戸対象の調査票調査を行なったものである。その結果のごく一部を本報告ではすぐこの後に提示してある。

なお本研究ノートは，調査後に集めてきたデータから明らかになった論点を提起してみたという性格のものであることを一言しておく。

屋比久部落における門中の概況

屋比久部落における門中のあり方について，とくに門中墓を念頭において簡単にみていくことにする。

①　屋比久部落には，調査時点で，８つの門中が認められた。構成戸（部落内）の多い方から挙げると，東門門中（41戸），伊利小前門中（13戸），新垣門中（12戸），呉屋門中（11戸），平田門中（９戸），新屋門中（３戸），島袋門中（３戸），小谷門中（０戸）の８つである。このうち小谷門中は，宗家（ムートゥヤー）が空屋敷ながら同門中の祭場として保存されており，子孫はすべて屋比久部落外に転出しているという門中である。他の門中も屋比久部落内だけでなく，那覇や中部など部落外に多数の成員戸を有している。

②　門中の役割について。表Ⅰⓐ〜①は部落全戸を対象とした質問紙調査での統計結果の一つである。門中が果たす機能について明らかにされているので提示しておいた。表Ⅰから，約言すると，次のようなことが分かるかと思う。第一点として，村人の日常生活上での主な相互扶助（金銭の貸借，農作業の手伝い，商売・仕事の相談，家の建築の手伝いなど）では親類が最も頼りにされていること。第二点として，部落や隣り近所は相互援助のうち葬式の手伝い，病気の見舞いなどとくに不幸事の生活場面で重要であること。第三点として，門中についてはその役割は，「墓の清掃・修理」というように門中墓に関わる事のみに限定されること，以上の三点である。なお付言すると門中については，表Ⅰⓗから，「正月・祭礼の訪問」も意外に少ないこと，この点もとくに留意される。

③　同じく質問紙調査から門中の役割について。自由回答形式の設問「あなたの考えでは，門中（ヒチ）のいちばん大事な役割は何だと思いますか」という設問に対する回答状況。一言で言えばこの設問に対しては，「門中墓の修理，修繕」というように門中墓に言及した者が目立って多いこと，上の②を裏付ける結果となっていることを指摘したい。その他みられる回答としては，祭祀，儀礼の実修—例えば「年中行事をやること」，「祖先を祭り大事にすること」，「集まって拝み事をす

第1表　「次のような助け合い、協力は、ふつうどんな間柄でしますか」

ⓐ **金銭の貸借**

	金銭の貸借
門中全体	4人（ 5.6%）
チュチョーデー	10（ 13.9）
親類	45（ 62.5）
トナリ近所	13（ 18.1）
部落全体	0（ 0.0）
合計	72（100.0）

ⓑ **墓の清掃・修理**

	墓の清掃・修理
門中全体	95人（ 91.4%）
チュチョーデー	6（ 5.8）
親類	3（ 2.9）
トナリ近所	0（ 0.0）
部落全体	0（ 0.0）
合計	104（100.0）

ⓒ **農作業の手伝い**

	農作業の手伝い
門中全体	1人（ 2.0%）
チュチョーデー	8（ 16.3）
親類	38（ 77.6）
トナリ近所	1（ 2.0）
部落全体	1（ 2.0）
合計	49（100.0）

ⓓ **商売・仕事の相談**

	商売・仕事の相談
門中全体	0人（ 0.0%）
チュチョーデー	8（ 14.0）
親類	45（ 79.0）
トナリ近所	3（ 5.3）
部落全体	1（ 1.8）
合計	57（100.0）

ⓔ **結婚式の参加**

	結婚式の参加
門中全体	25人（ 12.6%）
チュチョーデー	36（ 18.2）
親類	87（ 43.9）
トナリ近所	36（ 18.2）
部落全体	14（ 7.1）
合計	198（100.0）

ⓕ **葬式の手伝い**

	葬式の手伝い
門中全体	7人（ 5.3%）
チュチョーデー	6（ 4.6）
親類	23（ 17.4）
トナリ近所	18（ 13.6）
部落全体	78（ 59.1）
合計	132（100.0）

ⓖ **病気の見舞い**

	病気の見舞い
門中全体	14人（ 7.4%）
チュチョーデー	29（ 15.3）
親類	78（ 41.1）
トナリ近所	47（ 24.7）
部落全体	22（ 11.6）
合計	190（100.0）

ⓗ **正月・祭礼の訪問**

	正月・祭礼の訪問
門中全体	19人（ 13.6%）
チュチョーデー	31（ 22.1）
親類	81（ 57.9）
トナリ近所	9（ 6.4）
部落全体	0（ 0.0）
合計	140（100.0）

ⓘ **物品の貸借**

	物品の貸借
門中全体	1人（ 1.4%）
チュチョーデー	8（ 11.0）
親類	33（ 45.2）
トナリ近所	28（ 38.4）
部落全体	3（ 4.1）
合計	73（100.0）

ⓙ **家の建築の手伝い**

	家の建築の手伝い
門中全体	3人（ 4.6%）
チュチョーデー	13（ 20.0）
親類	38（ 58.5）
トナリ近所	8（ 12.3）
部落全体	3（ 4.6）
合計	65（100.0）

ⓚ **選挙の時の手伝い**

	選挙の時の手伝い
門中全体	6人（ 6.8%）
チュチョーデー	5（ 5.7）
親類	18（ 20.5）
トナリ近所	4（ 4.5）
部落全体	55（ 62.5）
合計	88（100.0）

ⓛ **モアイの仲間**

	モアイの仲間
門中全体	0人（ 0.0%）
チュチョーデー	3（ 4.8）
親類	32（ 50.8）
トナリ近所	21（ 33.3）
部落全体	7（ 11.1）
合計	63（100.0）

注　1）本調査は昭和62年3月に実施した。調査対象世帯数は105戸である。
　　2）回答は複数回答形式。但し「無回答」「非該当」は表では除外してある。

ること」などの回答が散見される。しかし門中の役割としてはここでいちいち提示はしないが門中墓の補修，維持に関することを挙げた者が圧倒的に多いことを強調しておく。

④　4番目として、上述の文脈から少しそれるが，門中の構成要素である年中行事について留意点だけを述べておく。屋比久部落でも戦後，門中の年中行事儀礼は急速に衰微した。現在部落内の門中で行われている年中行事はほぼ，清明祭（シーミー）および旧暦5月・6月のウマチーの2つである。

清明祭は旧暦の3月ごろ適当な日を選んで行なう。屋比久の門中の場合，門中の一族がいちどきに参集して行なう形式はとっていないとのこと。墓前祭り＝清明祭は各家族ごとにその日の都合の良い時間に合わせて行なわれる。また，ウマチーは旧暦5月と6月の二度行なわれる。ウマチーの様子については各門中が集まって部落内の六つの聖地（ノロ殿内，渡慶敷殿，屋比久殿，地頭殿，城殿，ウフナカ殿）を順次拝む。この儀礼が終わった後各門中の宗家にもどり門中ごとに祖先神に祈願するという形式である。

さて上の清明祭，ウマチーについてここで指摘したいことは次のことである。すなわちインフォーマントから共通に聞かれた感想として近い将来にこうした行事も消滅してしまうのではないかと予想していたことである。この根拠は門中の成員の熱意・関心がそれら年中行事に対しても殆んど欠如していると言うこと。具体的には，参集する人が非常に少ないこと，集まっても大体60歳以上の高齢者であること，とくに若者層に関心が全くみられないこと等の理由がインフォーマントから述べられたことである。門中の年中行事については，その重要性が急速に失われているのが屋比久部落の門中でも認められることを指摘しておきたい。

⑤　墓の供養。清明祭，ウマチーなど年中行事と対比して門中を考える上で示唆的だった。

部落内の門中は門中墓の年忌祭を死者の法事と同じように行なっていた。つまり一年忌，三年忌，七年忌，一三年忌，二五年忌，三三年忌，それがすむと再び一年，三年と繰り返すやり方である。但し平田門中だけは毎年行ない，その日を11月の第1日曜日に決めて行なっていた。理由は，三三年忌は一応終わったこと，毎年やれば上の年忌祭も結局行なうことになるからとのこと。

墓の供養に関して特徴的なことは次のことである。ウマチー等と対照的に門中墓の行事のときは老若男女が参集すること，遠く那覇や与那原辺りからも労をいとわず参じてくると言うことである。あるインフォーマントはこれについて，「墓には遺骨が納められているから」と説明していた。

⑥　6番目に，系図についても聞き取り調査の経験から述べておく。屋比久部落では筆者の調査した限り門中の系図を有している者はいなかった。正確に言えばきわめて不完全な，大学ノートの一ページに走り書きしたような系図を持っている人が二，三いたが，およそ門中の系図と言えるものではなかった。屋比久の場合戦前はどこの門中にも系図があり，現在ないのは戦争で焼失したからだと説明された。

系図についてここで問題にしたいのは，系図は門中の存立にとって必要不可欠なものではないと言うことである。このことは世代深度の深い門中にあって，家相互の系譜関係を整序することは重要ではないと考えられていることを意味する。

とはいえ上のことは村人が系図というものを重視していないということではない。村人の間では他面で門中の系図作りへの期待が強く語られたことは事実である。しかしそれにも拘らず，系図は門中が機能することに何ら必要ではないと言うことである。

系図に関して門中内における個々の家相互の系譜認識というものは概してきわめて不分明なものであることを指摘しておきたい。

なお少し飛躍するが，前出の表Ⅰの結果で「正月・祭礼の訪問」が「門中全体」では低調であることが示されていたが，あるいはそのことも上の事実に通ずる問題があるかもしれないことを述べておく。

⑦　最後に門中の経済的側面について。門中はその機能と役割を十全に果たすために経済的な裏付けを要する。これはいわば門中の維持，運営のための経費ということであるが，この経費の種類は大まかにいって二種類ある。一つは「ウサカティ」（御酒代）で，あと一つは門中墓の補修をと

くに目的とした資金である。

ウサカティはウマチーなど門中単位の神事を行なうための経費である。具体的には一年間の神事での供物や線香代を賄うための実質的な費用である。この集め方は門中によっては3ケ月毎に集めるところもあるが大体一年間に一回である。額のほうは比較的少額で一世帯一年間で千円前後である。ウサカティは世帯単位に一律に課すことを特徴としている。

一方門中墓に関する費用は場合によるが概ね不定期的に徴収される。これは専ら門中墓の修理工事に当てられるもので額も大きくなる。墓の補修はふつう墓の年忌祭のときに行なわれるため，その必要がでたときに計画的に数年前から積み立てるという方法をとる。この場合徴収割り当ては世帯ではなく，夫婦および男の子供の人数に応じて課されるということ。つまり死後門中墓に葬られる者に対して徴収されるという性格のものである。この点がウサカティと違うところである。

具体的な事例を挙げておく。東門門中の場合昭和27年に墓の補修工事をしたが，そのときの予算は2ケ年積み立てで集めたとのこと。夫婦に5銭，男子一人につき2銭を2ケ年間毎月集めてそれで賄った。あと一つ伊利小前門中は昨年墓を移転，新築したが，その資金はやはり積み立てによるものだった。娘は除外して夫婦と男子に課し毎月一人千円当て徴収，これを5～6年前から積み立てたとのこと。また不足分として農協から200万円借り入れたが，その返済計画も同様の積み立て方法で行なったとのことである。

門中についてこれまで考察してきたことと関連させて門中の経済的側面に関する問題を指摘しておく。従来門中の構成単位についてはこれを世帯（もしくはヤー）であるとしたり個人であるとしたりで議論が錯綜してきたという状況がある。この点も含めて，門中をめぐる経済的側面での特徴—門中墓とこれに葬られる者との結びつきは，門中をとらえていく上で記憶に留めておくべき要素の一つであることを注意しておきたい。

門中をめぐる諸相

屋比久部落の門中をめぐって村人から語られた証言の一部を以下にざっと提示しておいた。

「そうですよ，祖先をかためるために。集まらないとですね，自分の門中の人も分からなくなるわけよね。子供のときから，子供のときは全然分からないが次第に集まりが多くて分かってくるさね。こういうために集まりはもっているんでないか」（男性78歳）。

「とかくいわば血統だね，問題は。いえば血統だ，門中というものは。これが門中であってね，血統が」（男性82歳）。

「私の場合は系図を作ってみんなが分かるようにやりたいんだけども上が分からないわけさ。だから私は自分の筋だけでも，平田ヨシさんのところから分家してきているということをね，系図作ってやりたいと思うんです。これもしておかないとね，分からなくなる。自分の分かる範囲内ね，こういうことでもしておかないとね，分からなくなる。どこが上かあれか，この筋がひいてしまったら分からなくなる，どこから分家したか」（男性75歳）。

「（門中の）一番大事な仕事は先祖のつくりあげたお墓を大事にしていきたい，それが一番ですね。お墓というのはもう末長くずっとそこでいないといけないから。またとくにあんな山手の方にあんな大きな石を，機械もないあの時代どうしてあんな大きな石で積みあげたかということを考えてみた場合にですね。これはこのまましておくと大変な目に遭うがなと思いますよ。今の若い者が門中に対して認識のない，ウマチーなんかには門中が集まってお墓掃除するときなんかですね，そういうことよく話してきかせておりますがね。今の若い者は車の入るところにつくりかえたらという話がありますがね。でたらめなこと言うたらいかんよと言う。先祖がつくった墓というのはそうそう簡単には動かさない方がいいと，これが一つの歴史であるんだ沖縄の，また門中の。だからこれ末長く大事にして，今もちょっとセメントが何した場合にもすぐホソウしますからね」（男性71歳）。

「私の先輩が屋比久から南風原に行って，亡くなったらまたこっちのお墓に入ってますけどね。こういう人々なんかむこうで墓をつくったのがよ

くないかと思う。これもう行事の度にこっちに拝みに来ますからね，もう家族も大変ですよ。またお墓の掃除もね，七夕だとかあるいはお正月の十六日だとか年3～4回くらいはもう半日がかりでお掃除しますからね。お掃除も来なくちゃいかんし良くないんですけどね。だから門中制度というのはずっと続いたのが望ましいとは思いませんね」(男性55歳)。

「みんながね，協力一致して，このカミのこと，ファーフジのことをやってくださるのをもう私は何よりも希望しています。自分一人でね，行事々をお供えするよりは，もうやるべき行事はみんなが集まってやってくださるのが一番私は希望します。門中というのがなくなったら，もう自分一人のもうあれがなるわけでしょう。これはみんなの責任と思ってみんなが。またうちらの門中はみんな協力心があってですね，やってくださるから，私も門中のムートゥヤーのヌシ（主）としてももうほんとに有難いと思っています」(女性78歳)。

「ウチフカでも他人みたいなところもある。やっぱし沖縄でもね，沖縄の部落でも違うんです。私達の場合は祖先から，上から，こういう経緯が。ですから，今現在おられる方でもみな私達とはもう大分はなれてるんですね。だけど今でもこれはかたまりはつよい。もう上からこういう伝えがきているからね。女のかただったらね，今現在おられるかたなんかはもう親戚でもないみたいになる人だけど。シジティーチ（筋が一つ）だからね，もうこういう教えをうけてきているから，今でもこういうことはかたい。これはもう門中によって違うんです。ここらでもね，こういう遠いところもあるんですよね，やっぱしこれはもう門中によって違う。

歴史が古いというよりはね，屋比久部落に最初に来られた方が歴史が古いですよ。屋比久でももともと屋比久という部落があったんじゃなくてどこからか最初に屋比久に移って屋比久部落ができたわけだが，そのあとから私達は新里から分家して来たから，まだ若い。だけどこの門中の協力というのはね，私には平田門中の祖先からこういう伝えがきているから今でもこうかたまりがつよい。これはもう門中によって違うんですよね」(男性76歳)。

「門中に所属するよりは自分達で，自分個人で墓をもったのが良いという考え方の人々がおってね。たとえばここらから国頭辺りに行ってる人が自分で墓を買ってしまうんですよね。だからその，門中の感じがだんだん薄らいでいくわけ。今にもこっちから那覇辺りあるいは国頭辺りに行っている人々，もうあんな遠いところからこっちまで来る気がしないわけですからね。若い人々は自分達で一つの墓を，自分だけでもつという考え方もあるわけです。だから門中制度というものは追々はくずれていくものじゃないかと私は思いますけどね」(男性68歳)。

「お墓の年中行事の場合はね，朝起き作業というのをやるわけよね。草刈り，清掃作業ですね。そのときなんかね，部落の人よりも，今は車の時代だから那覇辺りからも与那原辺りからも遠くからも，この清掃作業に参加してくれるし。また参加できない者はできなかったからといってウマチーにですね，この旨参加はしなかったからといっておサイセンをあれしたり酒代をあれしたりですね。こういう方面がやっぱし血のつながりの，あれだね」(男性72歳)。

「いわば血筋は一つ。他人が門中にならない。やっぱし筋はひいているんですよ，門中は。遠く百年なっても二百年なってもね，上は一つ。これからこうして広がっているんであって。やっぱし，もう言えばヒトスジ，イチモン（一門）といってね。昔はもうウチナーグチでイチムンといって，もういつまでも一つだという。いつまでも門中の人は門中で，あの，血のつながりさ，これは全部門中の人は」(男性76歳)。

「だんだん親から伝えられてきたことを自分達もやってるわけですから，ずっと上のことはもう知りません。上からきた下からきく，こんなしてみんな伝わってきているはずだから。自分の近い親がやっていることを自分がうけ継いでいるわけですからね」(女性76歳)。

「今のところは非常に矛盾してるのがあるのですよね。たとえば門中の，屋比久の人が誰かが死ぬとなるとずっと遠いところからも来て一日中手伝うとかね。出られない人は一日にまた出られないかわりに五千円か六千円出さんといかんですよ。あの，街のようにね，人夫を頼めばいいとい

うことじゃないんです，門中の場合は。そういう矛盾があるもんだからね，若い人々はだからこの門中制度，あるいは今の葬式の制度とかいうのはね，嫌がるんですよ」(男性50歳)。

「門中はもうすてられないな，いつまでも。もともと子孫からいえば一番古い人からずっとここに入っておられるからね。で，お墓の中にはね。沖縄のお墓の中にはダンカンがあるわけよね，階段みたようなものが。で，一番古い人は上に座っておいてある。して，それから順序にして」(男性79歳)。

「たとえばですね，婿養子とって女の方に継がれるとしたら。たとえば私の場合よ，私の場合男ができなくて女に継がれることになったら，私まではこの門中に入れるわけなんだけど，この息子(婿養子)からは入れない，この東門門中のお墓には。筋が違うからね，いわば他人だから。まわりの人が受けつけない，まわりの人が。こういう経験はまだあたってないんだけどもね，そうなるんです，沖縄の場合は」(男性73歳)。

「門中で親しみのあるということはね，もともとないんじゃないでしょうか。ただ利用はしますね，選挙なんかには。自分の門中から出ると候補者が利用しているんじゃないかと思うけれども。たとえばこれから立候補するというときには必らず門中の人々を集めて自分達の親戚だという意識をうえつけるね。門中というのは，その子孫というのはあっちこっちにひろがっているわけですからね。だから門中の力というのは利用する人には大変大きいですよ。ところが普段の生活ではね，毎日の，『君は一緒の門中だよ』ということはないですね」(男性55歳)。

「私，いっぺんお墓の掃除のときにコーラニケース持って行ってね，演説したんですよ，お墓の前で。お墓の前で，しかも門中の皆さん方の中で選挙演説するのは僕一人だと。他人，たとえ他の部落のイトコに票を入れるとかあるいは親戚に票を入れるとかこれはいい，自由だから。しかし焼いてしまうと土に一緒になるのは門中だよと。この墓に入る者は，他人がは絶対入れないよと。お互い今日集まった連中は死んだらみんな土になってこの門中の中に入るんだよと。これだけ親しみがあるんだよということをね，強く訴えた場合があります、選挙の最中に」(男性71歳)。

「門中はずっと上からのものだから。だから二〜三代のあれだったら話しやすいけど，ファーフジ，クヮ(子供)，ウマグヮ(孫)，四代前は分かるがそれ以上になると分からない」(女性76歳)。

「やっぱり年寄りは年寄りなりにもっと門中を大事に拝まなくちゃいかんという考え方がこびりついているもんですからね。そこらへんは年寄りと若い者とのミゾをどうやって埋めていくかということですね。一つの大きな問題です。

まず大体集まって先祖を拝むということが今の若い人々にはないですね。もう他に野球見に行ったり遊びに行ったりしたって，門中に集まって一緒に手を合わせて神様を拝む，先祖を拝むということは今の若い人々にはちょっと，言うことが難しくてね。私達とは随分感覚が違いますね。そこらへんはもっとこういうものに関心を示してもらえればいいがなと思う場合もあるけれども，また彼らに言わせると，彼らなりに言い分がありますのでね」(男性71歳)。

「門中といっても，これ昔は『あそこのウマグヮだから』あそこから分かれてきたといってるが，だんだんもう長く続いてるでしょう。もう離れてしまっているでしょう。(血が)うすくなる。もうこれ何百年前の何だったか分かりませんのに」(女性80歳)。

「門中というのはやはり祖先は一つだから，みんなシュウレンが深いから，門中を愛するという気持があるでしょうね，どこに行っても。今でも那覇辺り行って墓を買った人は一人もおりませんよ，みんなやはり最後はうちに帰ってくる。そういう意味から，行事とかがありますね，お墓の行事がありますね。そういう場合はやはりみんな集まりますよ」(男性69歳)。

「あえて理由を言うとね。東門門中をつくってくださった祖先の，長男と次男の遺骨のカメがね，今だに残してあるんですよ。このぐらい大切にしてますよ。これをあんた，ヨソ者が入ってきてどうする。できませんよ，これは(婿養子のこと—筆者註)。

だから年忌というのがあるさね，お墓の年忌というのがあるわけ。昔は，その祖先の長男と次男の遺骨を出して我々みんなながめたんですよ。昔

の人の遺骨が今こんなに残っているか，我々の祖先が，こんなに遺骨が残っているかということでね。ちゃんとそれに名前も書かれています。で，何を勤めたという文字までうたれているんですよ。たとえば区長さんであったとかね，そういうような役目の，私達はよんでも意味は分からないけれどもね。どういう役目であったか，役目がカメのフタにちゃんと書かれて，今もあります」(男性70歳)。

とくに門中墓に対する村人の独自の意識が読み取れただろうか。

門中墓

上述してきた門中をめぐる村人の意識をうけるかたちで門中墓について検討しておきたい。

以下に屋比久部落の8つの門中のうち東門門中，平田門中，伊利小前門中について門中墓の様子を簡単に記述しておく。3つの門中にとくに限定したのはそれらについては偶然筆者が聞き知る機会があったからにほかならない。なお後者2つの門中に関しては比較的に乏しい情報しか提供できないことを断っておく。

① 東門門中。東門門中は屋比久で移住の歴史は古い方ではないが，屋比久で門中墓を最初に造ったのは東門門中であるとのこと。それはおよそ160年前のことである。それまでは土手を利用して壕のように深く堀った穴を墓として使用していた。この間の事情はどこの門中でも同様で，門中墓を造るまでは各門中とも自然にできた洞穴などを墓として使用していたとのことである。

② 東門門中が門中墓を造った当時同門中の構成戸は部落内に10戸ばかりしかなかった。門中墓を造ったのは「兄弟2人」が力を合わせてのことであるという。後述するが墓の内部が長男筋と次男筋の二つの空間に区切られているのは上の事情を物語るものであるとのことである。

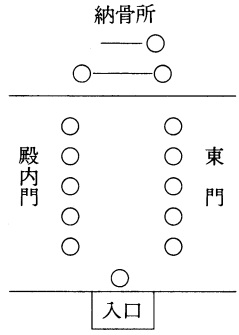
③ 東門門中が墓を建設した頃，農村では士族のように立派な墓を造ることは許されていなかった。それで東門の門中墓について王府から検査が行なわれたとのこと。検査の結果，農村にこんなきれいな墓は認めない，壊しなさいと命じられたとのことである。

それに対して東門門中では自分達が知念按司の子孫であることを主張して検査を通りぬけることが出来た。この知念按司は尚巴志と系譜関係があり生前佐敷間切を統治していたという人物である。この知念按司との関係は門中のニッチ（日記，記録帳のようなものか）にも書かれており東門門中ではそれを証拠として役人に見せたとのこと。このニッチは今次大戦で焼失して現在はない。

④ 東門門中の門中墓の様子。東門の門中墓はこれまで移転の経験がなくほぼ建設当初の姿で同地に立っている。墓の内部は二つの空間に分かれており門中の人々から明確に認識されている。もっとも二つの空間は何かの標識で区切られているわけではない。それぞれの空間は門中の人々から「東門」（東門門中の宗家の屋号，長男腹）および「殿内門」（同次男腹の屋号）と呼ばれている。「東門」は墓に向かって右側，「殿内門」は同じく左側である。

墓への納骨の仕方については，いずれ遺骨は墓内の奥部の納骨所に納めることになっている。但しそれに先立ちある期間遺骨は骨壺の中に入れたまま墓内に安置するようにしてある。

⑤ 図Ⅰは墓の内部を示したものである。上④に補足するかたちで説明しておく。まず墓の入口から奥の納骨所まで階段状になっていること。階段の左右にはそれぞれ門中の次男筋（「殿内門」），長男筋（「東門」）の死者の遺骨壺がいくつかずつ置かれていること。墓の入口にもっとも近い遺骨壺が最近年死亡した者の壺であり、奥の方にいく



注）○は遺骨壺、—は階段を示す。

図1 東門門中の門中墓の内部

につれて死亡年が古い者の壺が置かれていること。そして遺骨壺がある数を越えると奥の方の遺骨壺から順次遺骨を出して納骨所に入れる（壺は処分）こと等である。

⑥　特別に安置されてある遺骨壺。死者の遺骨は最終的には壺から出して納骨所に納めるが，東門門中の場合，例外的な処置を受けている遺骨壺（ジーシガーミ）が3つある。これらの遺骨壺は昔から動かしてはならないといわれてきたもので，納骨所の手前に安置してある。

3つの遺骨壺にはいずれも東門門中の最初の頃の先祖の遺骨が入っているとされる。このうち2つの壺は形も似ておりそれが寺の形をしていることからテラジーシと呼ばれている。

⑦　上の3つの遺骨壺のうち残る一つについては，3つの中で最も古いものであると言われている。その壺は門中墓の建設もずっと以前からのジージガーミであると思われること，後年になってどこかから門中墓に移されてきたものではないかという，門中の人の語るところである。

東門門中の伝承について最も詳しいと自他ともに認めているZ.C.氏（78歳）はこの壺に関し次のように推理した。一言で言えば，この骨壺の中に入っている人は「知名掟親雲上」という名の先祖ではないかと言うことである。その根拠は東門門中の宗家の仏壇に祀られている位牌のうち最も古いものに「知名掟親雲上」と書かれた人の位牌があるからである。Z.C.氏によればこの知名掟親雲上については前出の知念按司の近い子孫に当たるという伝説のある人物である。

なおこの遺骨壺の表面には文字等が記されているが門中関係者ではそれを判読できなかったという。

⑧　引き続き東門門中の門中墓の様子について。東門の門中墓は「本墓」と「仮墓」の二つから成っている。このうち前者は東門が部落に門中墓を建設した当初からの墓である。これに対し後者の「仮墓」は今から62年前に造ったもので，本墓に向かって左側に増築した形で造られた。この仮墓を新たに造ったのは，門中成員，死者の増加にともない本墓だけでは間に合わなくなったからである。当時は今と違って沖縄には火葬の習慣がなく，死者が増えればたちまち墓内は一杯になったのである。

なお仮墓も内部が「東門」と「殿内門」の二つに区切られているとのことである。

⑨　仮墓について。仮墓の役割は字義どうり，本墓に収容できない死者を一時的に安置しておくことである。その期間はとくに定められているわけではなく来たる年忌のときまでということであった。数年後の年忌のときまでには死体は遺骨になっているからそのときに遺骨は本墓に移すことを予定していた。最終的には遺骨は「全部一つに」ということで，仮墓はあくまで臨時のために造られたとのことである。

⑩　仮墓については当初の計画にもかかわらず，仮墓は十分にその役割を果たすことができなかった。それは近親者が仮墓に一時的であれ死者を入れることに躊躇したからである。仮墓に収容することができたのはわずかに説得できたものに限られたという。

死者を出した家が結局は仮墓を使うことに反対したのは右の理由による。それは彼らが一様に口をそろえて，ウヤファーフジは本墓の方に入っていること。したがって初めからそこに収容してほしいと強く主張したことである。

この仮墓については火葬の習慣の定着もあって40年程前から既に使用されなくなった。仮墓についてもう不必要になったから壊してもよいのではないかという意見も一部にあること。しかしせっかく造ったのだから勿体ないという旨でそのままにしてあるとのことである。

⑪　次に平田門中および伊利小前門中について記しておくことにする。先に述べたように平田門中，伊利小前門中の門中墓について筆者はさほど知識を持っていない。そこで上にみてきた東門門中の補足という形にして，平田および伊利小前門中に関し簡単な事実を示すにとどめることにする。

⑫　平田門中。話者の語るところによると，平田門中が門中の墓らしい墓を造ったのは今（話者）から数えておよそ9代前である。平田門中の祖先でその頃首里城に奉公をしている人がいたとのこと。この人が奉公先にて信用が篤く人物が認められた結果，墓の建設を許可されたのだという。このとき姓も授与された。

話者によれば，かつては平民百姓が士族の墓を模倣して立派な墓を造ることは許されなかったとのこと。この点，先の東門門中と同様である。

墓を建設した地は隣村の大里村であった。首里城を見渡せるところを選んで造ったからということである。

現在の地（部落内）に墓を移転したのは約95年前である。

⑬　門中墓の中の様子。平田門中でも遺骨は壺から出して奥の方の納骨所に納めるようにしてある。かつては遺骨壺はそのまま安置していたとのこと。しかし遺骨壺が増えて墓内が狭くなったため，壺は処分し遺骨を納骨所に納めるようにした。これはいつ頃からそうするようになったのかははっきり分からないと言う。なお平田門中でも東門門中と同様に遺骨壺を一定期間置いた後遺骨を納骨所に納めるようにしてある。

墓の内部は長男腹と次男腹の二つの空間に区切られている。

⑭　4個の遺骨壺。平田門中の門中墓にも特別な遺骨壺が4個安置されている。この中にはやはり門中の初代の方々の遺骨が入っているとのこと。これらの遺骨壺は長男腹の空間の方に安置されている。これらについてはそのまま動かしてはならないと言うことである。

⑮　最後に伊利小前門中について。伊利小前の現在の門中墓は，去年山手の方から移動して新築した墓である。これは前節の，門中墓の補修の問題を記述したところでも紹介した墓である。移動の具体的な理由は「上にはススキが一杯して（人も）よばれないから下におろしてきた」とのこと。つまり便宜を考えてやむなく移転させたというわけである。

⑯　伊利小前門中の屋比久への移住については祖先が同じ町内の手登根部落から分かれて来たという伝承を持っている。墓ももともと手登根部落にあったとのこと。それも山手にあり，昔は高いところ，首里城が見えるところに墓を造りたいという意向が強かったそうである。このことは既に平田門中でも聞かれたことである。

⑰　手登根での墓建設のいわれ。手登根部落で初めて門中墓を造ったとき，3つの親戚が一緒になって造ったと言うことである。屋比久部落の現在の墓でも墓の内部を三つの空間に区切ってあるが，これは上の事情にもとづくとされる。なおこの区切り方については，東門，平田門中のような長男腹，次男腹などとは少し違うと言うことである。

伊利小前門中では，これまでの死者の遺骨はすべて遺骨壺に入れたまま安置してあるとのこと。墓の中には現在約26個の遺骨壺が置かれている。この遺骨壺は一個につき一家族のためのものである。最も新しいのは6～7年前に亡くなった人の壺である。

墓の奥の方には納骨所も設けられている。

⑱　締め括りとして，門中の初めの頃の祖先の遺骨を納めてあるという遺骨壺。東門，平田門中と同様に伊利小前門中でもこの壺はとくに区別されて安置されている。

遺骨壺の表面には故人の名前などが書かれているとのこと。伊利小前門中では去年の墓移転の際，ある大学の先生に頼んでその文字を判読してもらったという。

話者の一人はそれを紙に控えてあり筆者に見せてくれた。それをそのまま下に書き写しておく。

大清康熙二十三年甲子七月十六日
「道翁紹徳禅定門」前中
屋比久親雲上

および

前中屋比久親雲上女子
真加戸樽安座間親雲上
通心如源信女洗骨比厨子
納之干時死去
康熙五十一年壬辰十一月六日

の2つの遺骨壺である。

以上，屋比久部落の門中墓に関し，東門門中，平田門中，伊利小前門中について簡単に記述し検討してみた。大まかな素描にすぎなかったが各門中の門中墓にはいくつか共通点も認められたことが言えるのではないかと思う。乏しい情報の中で，それに立ち入って考察するにはむろん限界がある。ただここでは，屋比久部落における門中墓というものがいくつかの重要な要素から成り立っている，という事実だけを指摘しておくにとどめたい。

結　語

本報告は，はしがきでも述べたように，沖縄の門中に対して一つの視点を提示することを試みたものである。この目的のために，屋比久部落における門中をとおして，順次門中の役割，門中をめぐる村人の意識，そして門中墓について大まかながら具体的な描写を行なったわけである。本報告の中から筆者が意図したことが少しなりとも読み取られているなら，本報告はその目的を果たしたと言える。

本文を補足する形で一言しておきたい。沖縄における門中については従来，観念的側面からこれを明らかにするという視角がややもして欠如していたように思われる。本報告で筆者がとくに門中墓に注目したのは，そうした視点に立脚してみたものにすぎない。

今後門中を理解していく上で，門中墓をめぐる諸々の論点を明らかにすることがその一つの道であるということ，このことを筆者の研究課題としてあえて最後に付言しておく次第である。